福岡市埋蔵文化財調査報告書第979集

SIGE TOME MURA SITA

重留村下遺跡4

－重留村下遺跡群第5次調査報告－

2008

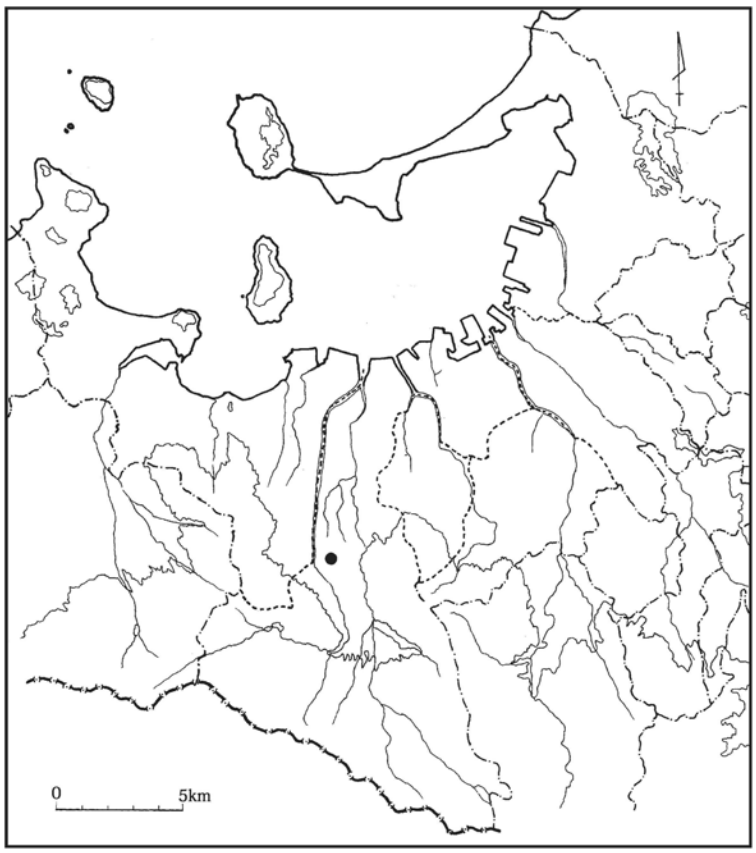
福岡市教育委員会

福岡市

SIGE　TOME　MURA　SITA

重留村下遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第979集



調査番号　０６２１

調査略号　ＳＧＭ-５

２００８

福岡市教育委員会

序

福岡市西郊の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が営まれ、豊かな自然と多くの遺跡が残された地域です。

福岡市ではまちづくりの目標としての都市像に、ひとつに自然を生かす快適な生活の都市、ひとつに海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。

しかし快適な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によって、やむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は本市早良区重留6丁目において平成18年度に発掘調査を行なった重留村下遺跡群第5次調査の成果報告をするものです。

調査の結果、古墳時代の流路から祭祀の跡を示す多くの土器と木器を検出し、中でも舟形木製品・刀状木製品・石杵は、本市でも10例に満たない貴重な資料でした。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝申し上げる次第です。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長　山　田　裕　嗣

例　言

1.本書は田中隆司氏が実施した早良区重留６丁目642-2,5・650-2において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成18年度に実施した重留村下遺跡群第５次調査の調査報告書である。

2.本書で用いる方位は磁北で、真北はこれに6°21′東偏する。

3.調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。

4.遺構の呼称は略号化し、土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。

5.本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・川嶋京子による。

6.本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子による。

7.製図は井上加代子による。

8.本書に用いた写真は加藤による.

9.本書の執筆・編集は加藤が行った。

10.本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1

Ⅱ．調査区の立地と環境 …… 2

Ⅲ．調査の記録 …… 6
　1．調査の概要 …… 6
　2．縄文時代の調査 …… 9
　3．古墳時代の調査 …… 9
　4．古代・中世の調査 …… 23

Ⅳ．小結 …… 26

挿 図 目 次

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 3
Fig.2　調査区位置図（1/4,000） …… 4
Fig.3　調査区周辺測量図（1/500） …… 5
Fig.4　遺構全体図（1/100） …… 7
Fig.5　縄文・弥生時代石器実測図（2/3） …… 9
Fig.6　SD01実測図（1/80） …… 10
Fig.7　SD01出土遺物実測図.1（1/3） …… 12
Fig.8　SD01出土遺物実測図.2（1/3） …… 13
Fig.9　SD01出土遺物実測図.3（1/3） …… 14
Fig.10　SD01出土遺物実測図.4（1/3） …… 17
Fig.11　SD01出土遺物実測図.5（1/3） …… 19
Fig.12　SD01出土遺物実測図.6（1/3） …… 21
Fig.13　SX02実測図（1/60） …… 22
Fig.14　SK03・04・05・丘陵部土層断面実測図（1/40） …… 23
Fig.15　古代・中世出土遺物実測図.1（1/3） …… 25
Fig.16　吉武・重留村下舟形木製品 …… 26

写　真　目　次

Ph.1　調査前状況（北東から）…… 6
Ph.2　調査区遠景（北西から）…… 8
Ph.3　調査区全景（北西から）…… 8
Ph.4　縄文・弥生時代石器 …… 9
Ph.5　流路SD01（北西から）…… 11
Ph.6　SD01（北東から）…… 11
Ph.7　SD01出土土器 …… 15
Ph.8　舟形木製品39出土状況（北から）…… 16
Ph.9　横槌形木製品40・土器34出土状況（南から）…… 16
Ph.10　刀状木製品43・W3出土状況（北東から）…… 16
Ph.11　石杵53他出土状況（北から）…… 16
Ph.12　舟形木製品39 …… 18
Ph.13　SD01出土木器 …… 20
Ph.14　SD01出土石器 …… 21
Ph.15　SX02土層断面（東から）…… 22
Ph.16　SX02・SK05（北西から）…… 22
Ph.17　SK03土層断面（北東から）…… 24
Ph.18　SK03（北東から）…… 24
Ph.19　SK04（南西から）…… 24
Ph.20　丘陵部土層断面（北西から）…… 24
Ph.21　古代・中世遺物 …… 25

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市早良区重留６丁目642-2,5・650-2において、田中隆司氏より共同住宅建設に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、平成18年２月７日に事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は1179.36㎡、受付番号は17-2-1062である。

埋蔵文化財課で確認した所、申請地が重留村下遺跡群の範囲内であり、遺跡の内容など状況を把握するため同年３月２日確認調査を実施し、結果、申請地東半部で古墳時代の土坑・溝・柱穴を検出した。

本課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として、軟弱地盤のため杭打ちを伴う基礎工事で保存は困難と判断した。そのため遺跡の破壊を伴う東部建物部分に限定して事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同氏と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成18年６月５日に着手、同年７月５日に全ての行程を終了した。

調査番号	0621	遺跡略号	SGM-5
調査地地籍	早良区重留６丁目 642-2,5・650-2	分布地図番号	84（重留）0324
開発面積	1179.36 ㎡	調査実施面積	200.1 ㎡
調査期間	060605 ～ 060705	事前審査番号	17-2-1062

2．調査の組織

【調査委託】田中隆司

【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　植木とみ子（当時）

【調査総括】文化財部長　山崎純男（当時）　埋蔵文化財第２課長　力武卓治
調査第１係長　池崎譲二（当時）

【調査庶務】文化財管理課　後藤泰子（当時）

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】芦馬光夫　樋口スミ子　川嶋京子　松尾和子　　柴藤清志　西納富士夫　青木和代
青木真孝　佐藤直利　　三村悦子　染井美保子　野田英機

【整理作業】木村厚子　国武真理子　南里三佳　竹田幸子　平川泰世

II. 調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ5.5㎞、旧海岸線より南へ6.5㎞の地点の、室見川が貫流する早良平野の南東部、油山山塊から北西に樹枝状に派生する低位段丘の砂礫台地群の、南北約710m・東西約330mの範囲に広がる重留村下遺跡の中央西端に位置する。標高は約28mである。(Fig.1)。

室見川右岸の周辺の歴史環境を概観してみると、中位段丘や中位段丘下位面残丘の台地・独立丘上に旧石器・縄文早期の遺跡が点在しており、有田遺跡群(2)・飯倉F遺跡(3)・野芥遺跡(17)第7次調査・本遺跡(1)・東入部遺跡群(18)でナイフ型石器・細石器が、縄文時代早期はクエゾノ遺跡(19)・前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群(4)・田村遺跡(5)で轟B式土器・曽畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基・四箇遺跡群で埋甕・竪穴・竪穴住居・特殊泥炭層(堅果類果皮の多量堆積一ヒョウタン・リョクトウ出土)が出土。晩期では前半に重留遺跡(20)で竪穴住居が検出され、突帯文の時期に増大し有田七田前・拾六町ツイジ・四箇・四箇東(6)・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋甕・竪穴住居等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く、有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。また、内陸部の東入部遺跡・野芥調査でも甕の破片が出土している。前期後半からは有田遺跡群や田村遺跡群、内陸平野部にも飯倉遺跡群(3・7～12)・東入部遺跡群など集落・甕棺墓が展開し、中期にはさらに面的な広がりを見せ内陸奥部にまで及ぶ。岩本遺跡(21)では水田が検出された。海岸部の西新町遺跡では無文系土器・板状鉄斧と含鉄鉄滓・ガラス容器・ガラス玉等海洋拠点的な様相を示し、原遺跡(13)では半島系瓦質土器を、東入部遺跡群で甕棺130基中より細形銅剣1・銅釧10・素環頭刀子1・鉄矛1・鉄刀1・鉄剣1・鉇1を、飯倉C遺跡(9)では甕棺から細型銅剣・素環頭太刀が出土、有田遺跡群では甕棺から細型銅戈・前漢鏡などが出土している。免遺跡群(14)では大規模な井堰が検出されている。後期では飯倉D遺跡(10)で後期後半の集落から小型仿製鏡の鋳型・鉄器鍛冶関連遺物が出土している。

弥生終末から古墳時代前期にかけては海岸部に西新町・藤崎で竈を持つ住居・方形周溝墓等が検出され、三角縁鏡などが出土。多くの漁具と引き続き瓦質・陶質土器等半島系土器を目立って出土する。平野部では重留・有田遺跡で集落が検出され、中期ではクエゾノ古墳群(15)で前方後円形の1号墳が検出され、重留で70m級の前方後円墳(拝塚－重留1号墳)・方墳(重留2号墳)があり、飯倉H遺跡(16)では27mの小型の前方後円墳(梅林古墳)を検出している。重留では須恵器窯が、梅林遺跡(22)では大壁建物・オンドル住居が、クエゾノ古墳群では多量の鉄滓と鍛冶道具が出土する。6世紀前半～中頃にかけ山麓部の重留古墳群(23)・三郎丸古墳群(24)で古墳群の造営が始まり6世紀の後半以降から荒平にかけにわかに増大する。集落は有田遺跡群・原遺跡群・田村遺跡群・飯倉遺跡群・重留・東入部遺跡群等に展開する。

古代では有田遺跡群で7～8世紀の早良郡衙と考えられる建物群が検出。野芥遺跡第4・12次調査では大型建物群と緑釉・円面硯・刻字土器等が出土し、官衙と思われる。重留遺跡でも円面硯、東入部遺跡では大型建物群と唐三彩・石帯等が出土し、同様に官衙と思われる。

中世では、田村遺跡群・次郎丸遺跡群(25)・次郎丸高石遺跡(26)・清末遺跡(27)等で集落が調査され、清末遺跡では方形に区画された居館が検出されている。

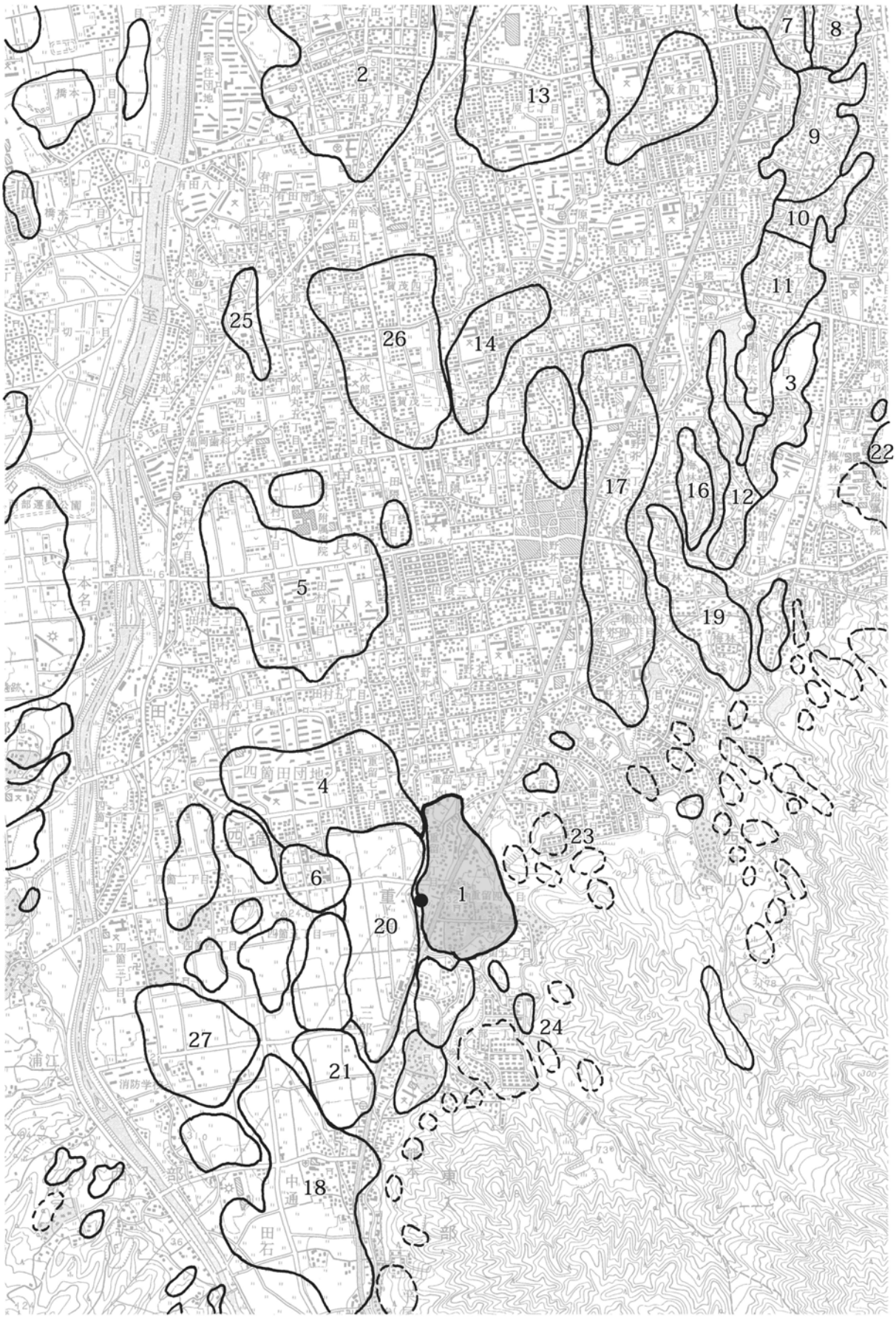


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

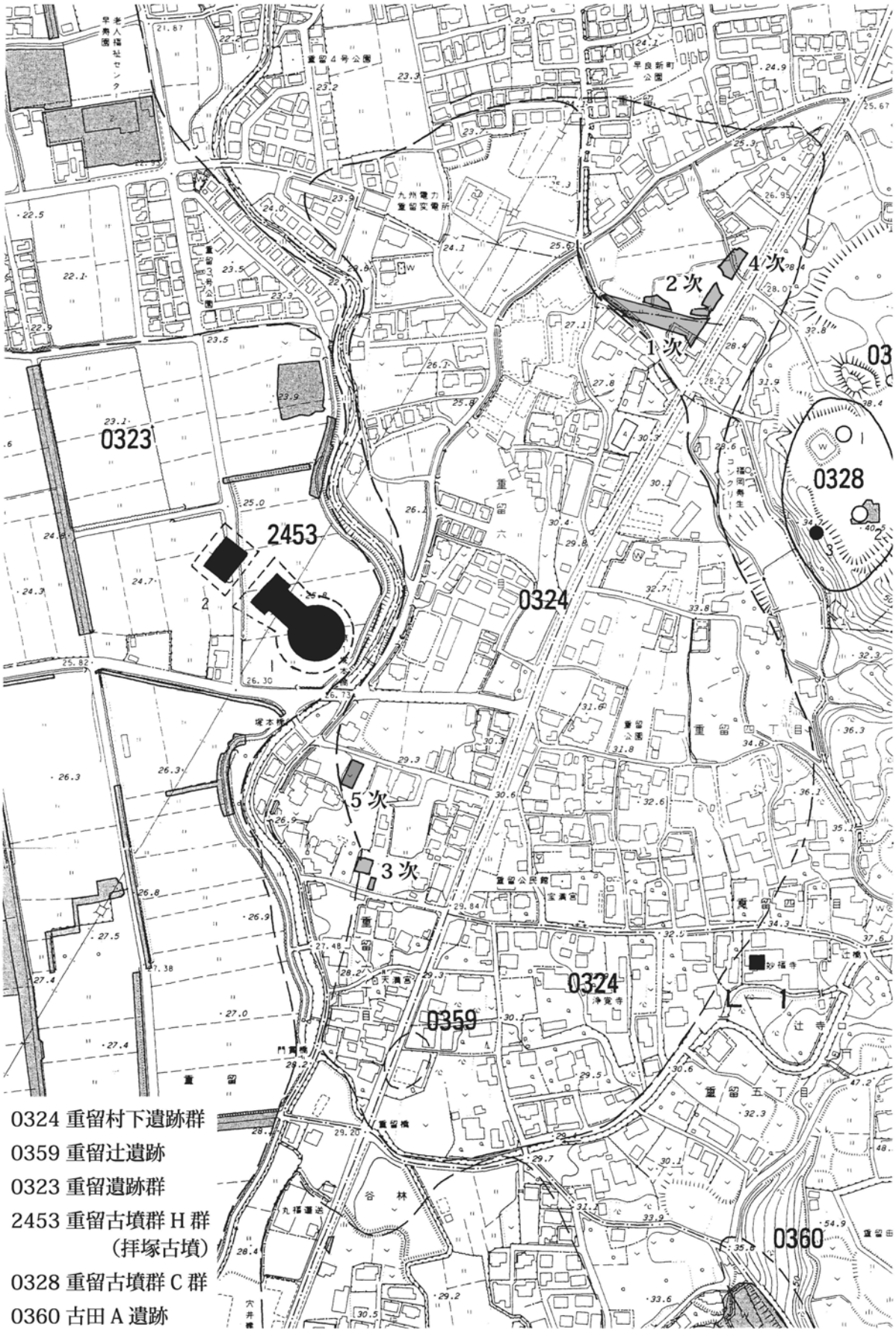


Fig.2　調査区位置図（1/4,000）

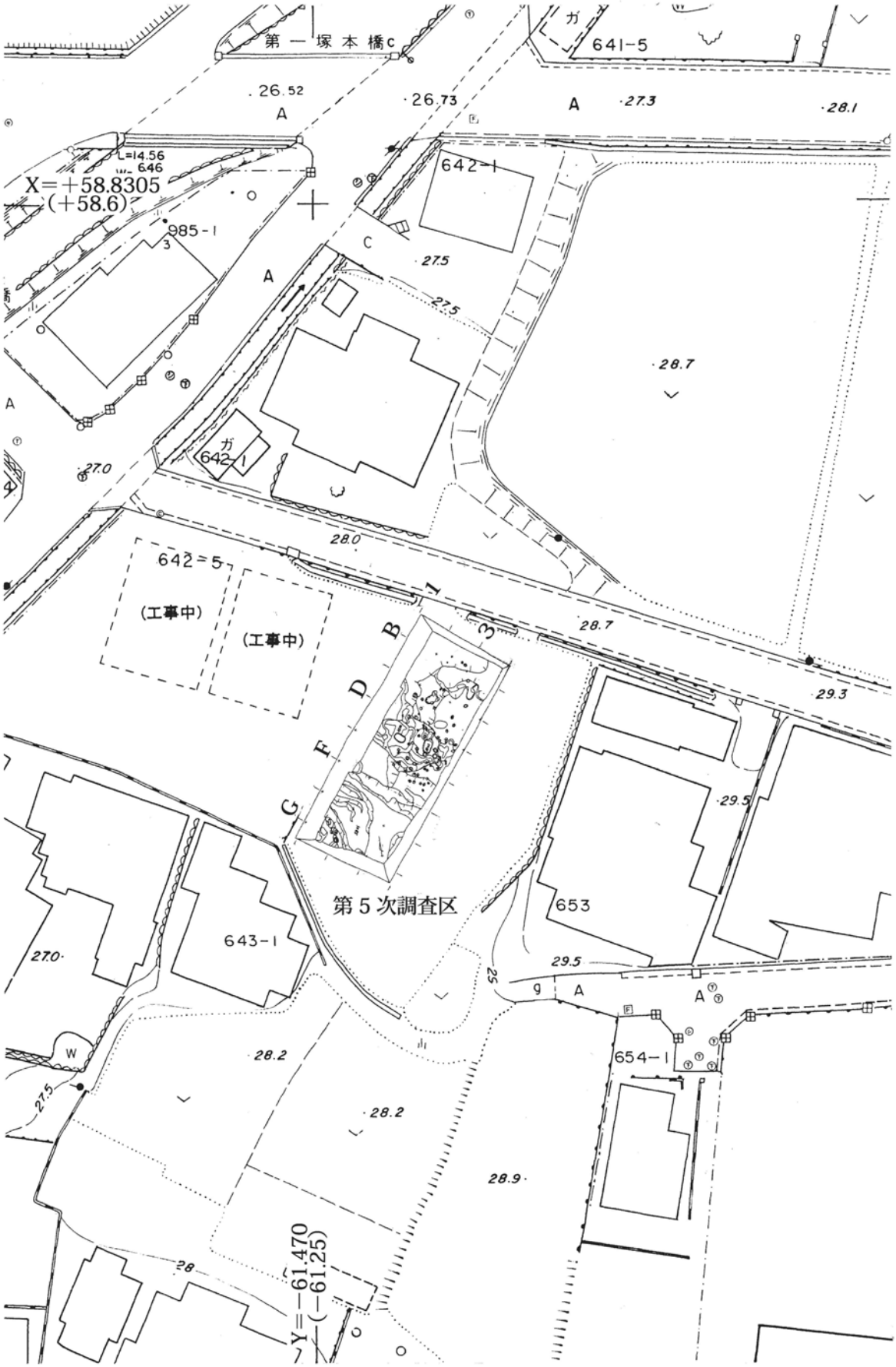


Fig.3　調査区周辺測量図（1/500）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

本調査区は早良平野の南東奥部、金屑川右岸の、油山山塊から西に延びる低位段丘の砂礫台地上に東西330m南北710mの範囲に広がる重留村下遺跡の中央西端に位置する（Fig.2）。東側の丘陵上には重留古墳群（0328）や6世紀前後の重留須恵器窯があり、西側には縄文時代～中世の四箇遺跡・重留遺跡群（0323）が隣接し、調査区北西100mには拝塚前方後円墳（2453）が位置する。

遺跡内では4次にわたって調査が実施さており、本調査区より北北東380m程の第1次調査では約1,100㎡の面積で、縄文後期包含層、弥生時代中期中頃から後期初の土壙・溝、古墳時代Ⅱ～Ⅳ期の竪穴住居・土壙・溝が検出され水晶飾未製品・精錬炉送風口・鉄滓等が検出、他に古代・中世の土壙が調査されている。これに隣接した、第2次調査では約200㎡の面積で、弥生時代中期中頃の土壙、古墳時代Ⅳ期の竪穴住居、中世の土壙が調査されている。南60mと程近い第3次調査では104㎡の面積で、古墳時代前期の竪穴住居が調査されている。第1次調査区北40m程の第4次調査区では241㎡の面積で、古墳時代後期の竪穴住居、古代の土壙、中世の溝・土壙が調査されている。

今回の発掘調査は、6月5日・6日に重機による表土剥ぎを実施し、8日より作業員12名を導入し遺構検出を開始した。9日より調査区南の古墳時代流路SD01を掘削、多くの土器・木器を検出した。15日に掘り上がり、SD01の全景を撮影し、台地上の遺構掘削・測量・遺構実測を開始。22日～26日にかけての大雨で現場全体が水没、南東の壁面が大きく崩落し、復旧に2日を要した。28日に調査区全景を撮影し、29日に測量・実測を完了した。30日にユニットハウスの撤去・重機による埋め戻しを実施し、7月5日調査機材を撤収し調査を完了した。

調査は、表土下約80㎝程の、耕作土・客土および暗褐色混粗砂土包含層下の緑灰色シルト～黒灰色混土粗砂礫の上面（Fig.6・14）で遺構検出を実施した。遺構面の標高は27.3mである。調査区内は北・西・南の三方を古墳時代の腐植土が堆積する低湿地に囲まれ、樹枝状に谷が開析する扇状台地先端に位置しており、集落の中心からは外れている。今回の調査の中心となるのは調査区南の幅6.5m程の流路SD01で、5世紀初頭前後の高坏・壷を中心とする土師器、舟形木製品・刀状木製品・横槌などの木器、石杵等多くの資料を、狭い範囲でありながらコンテナ4箱分検出した。また、流路北の台地上では径6m程の古墳時代土壙を中心に、柱穴・古代～中世の焼土壙2基を検出した（Fig.4）。

Ph.1 調査前状況（北東から）

以上、流路SD01からは、多量の4～5世紀代の高坏・壷を中心とする土師器、舟形木製品・刀状木製品、石杵など古墳時代集落の水辺での祭祀が執り行われた状態が見て取れ、また、出土した舟形木製品・刀状木製品・石杵は市域で数例の貴重な資料であった。

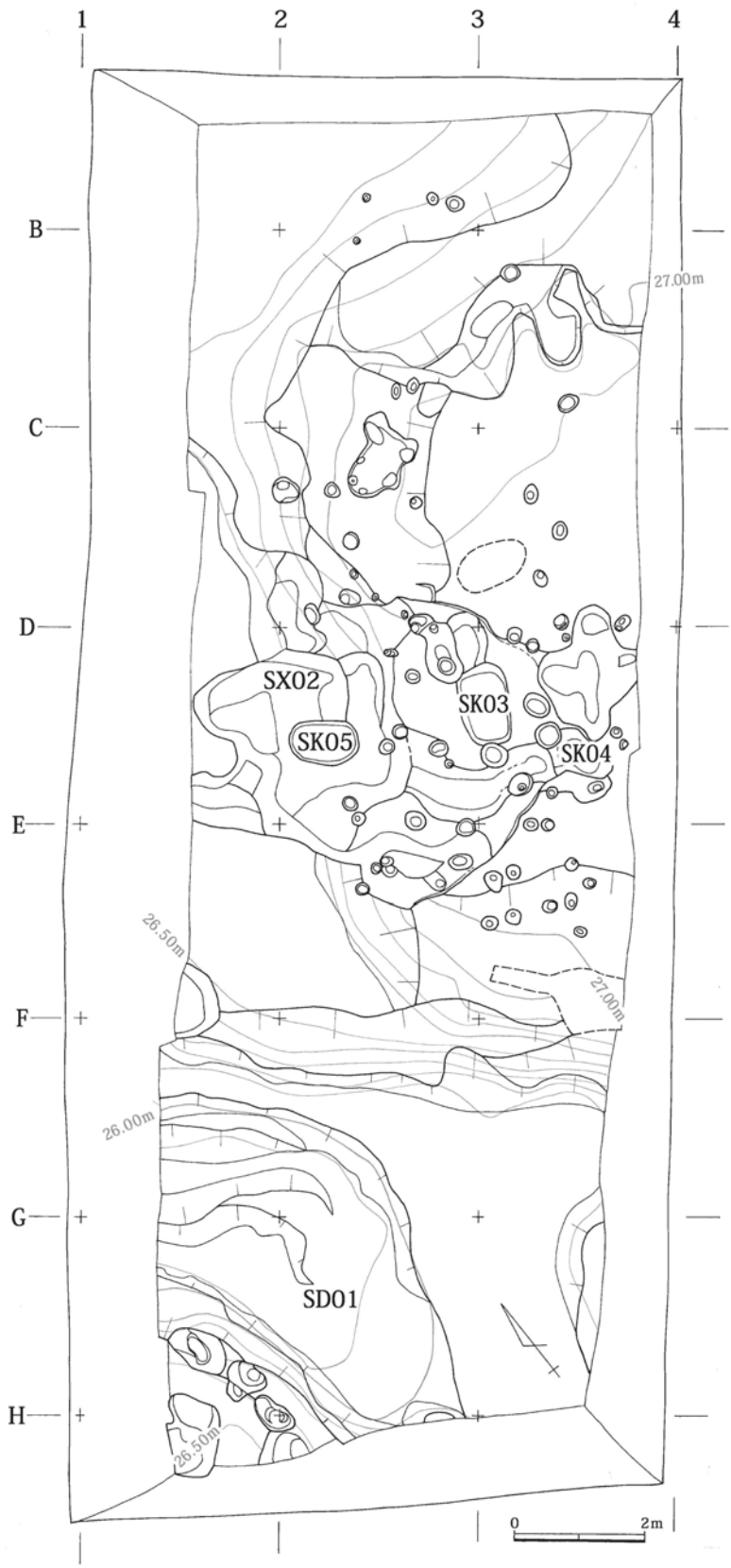


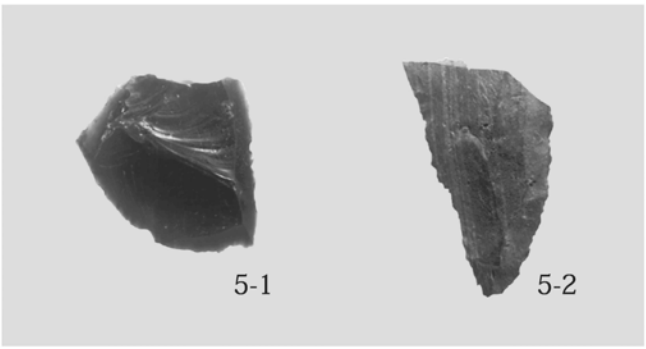
Fig.4 遺構全体図（S=1/100）

Ph.2 調査区遠景（北西から）

Ph.3 調査区全景（北西から）

2. 縄文時代の調査

縄文時代の資料は、古墳時代の流路SD01・土壙SX02覆土から混入した状態で検出され、該期の遺構・包含層としては検出されない。**出土遺物**（Fig.5 Ph.4） 1はSD01出土の31×31×7㎜を測る腰岳産黒耀石打面再生剥片を用いたuflで、打面以外の3側辺を使用している。風化は若干進み縦方向の層理が見える。2はSX02出土の41×27×8㎜を測るサヌカイト横長剥片を用いた削器で、主剥離側左半部を欠損。左側辺に主剥離側から調整剥離を行う。右辺にも使用痕がある。風化は中程度進み縦方向の層理が見える。



Ph.4 縄文・弥生時代石器

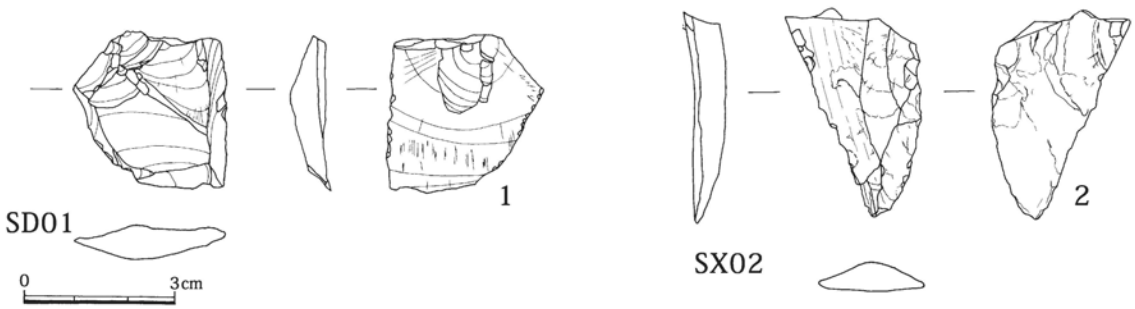


Fig.5 縄文・弥生時代石器実測図（S=2/3）

3. 古墳時代の調査

丘陵先端部の本調査区は、古墳時代は北・西・南の三方を腐植土が堆積する低湿地に囲まれ、殊に南の幅6.5m程の流路SD01からは多くの5世紀初頭前後の高坏・壷を中心とする土師器・舟形木製品・刀状木製品・横槌等の木器、石杵等多くの資料を検出した。丘陵上では径6m程の土取場と思われる不整形土壙SX02を検出した。

1）.流路SD01（Fig.6 Ph.5・6） SD01は調査区丘陵南側を北流する幅6.5m程の流路で、区内で2本の支流が合流する地点であり、西が幅約4mで本流となる。丘陵上面からの比高差は1.2m程で、上下2枚の粗砂層を挟んで、1.1mまで黒灰～暗褐色の腐植土層が厚く堆積し、水は殆ど滞留している状態である。調査区の立地が丘陵先端でもあり、程近い下流側に井堰等の潅漑施設が想定される。東西岸は切り立っており、人為的に削岸され管理された流路である。遺物の殆どは下層の粗砂層上に堆積した腐植土中からで、コンテナ4箱分検出されている。

出土遺物（Fig.7～12 Ph.7～14） 3～38は土師器で、3～5は直口壷。3は口径13器高18.5㎝、口縁内外はヨコナデ胴部外面はハケで上半は緩くナデる。内面はナデで下半に指頭圧痕が残る。灰黄褐色を呈す。4は口縁がやや内湾し口径13器高16.5㎝。口縁内面にヨコハケ後内外をナデ、外面頸部に

はタテハケが残る。胴部外面は不定方向のハケを施し、内面には右上がりのケズリ。赤色粒を含み鈍い黄橙色を呈す。5は口径13.4㎝の口縁部で外面頸部上が若干肥厚。口縁内外はヨコナデ。鈍い橙色を呈す。6は在地系の二重口縁壺で内湾気味の口縁の口唇がやや外反。口径19㎝。口縁内外面にナナメハケ後口唇内外と口縁外面をナデ消し、頸部外面にタテハケ内面にヨコハケ。粗い石英粒を多く含み明黄褐～褐灰色を呈す。7～9は山陰系の二重口縁甕。7は短頸で外反気味の口縁で口唇外端が張る。口径14.4㎝・胴径24㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面上位はヨコ・中位はナナメ・下位にタテハケを、内面頸部下にヨコ・ナナメケズリ。粗い石英粒を多く含み灰色を呈す。8も外反気味の口縁片で口唇外端が張る。口縁内外面にヨコナデ。鈍い黄橙色を呈す。9は外傾する口縁片で、口唇上面を面取りし凹線を施し内外端が張る。口縁内外面にヨコナデ。胎土は精良で灰黄褐色を呈す。10・11は布留式系甕で、10は内湾気味の口縁で内傾した口唇上面を面取りし凹線を施す。口径17.2㎝・胴径24.2㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面上位は横位のタタキ後タテハケ・中位はナナメ・下位にタテハケを、内面頸部下に上位にヨコ・下位にタテケズリ。石英粒を多く含み鈍い黄橙色を呈す。10は内湾気味の口縁で内傾した口唇上面を面取りし凹線を施す。口径17.2㎝・胴径24.2㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面上位は横位のタタキ後タテハケ・中位はナナメ・下位にタテハケ、内面頸部下に上位にヨコ・下位にタテケズリ。石英粒を多く含み鈍い黄橙色を呈す。11は内湾気味の口縁の端部を丸く収め口径17㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面上位はヨコハケ後頸部下をヘラナデ、内面頸部下にヨコケズリ。粗い石英粒・赤色粒を多く含み鈍い褐灰色を呈す。12～17は直線的に外傾する口縁の甕で、12は頸部の締まる器形で口縁の端部を丸く収める。口径15㎝。口縁内外面にハ

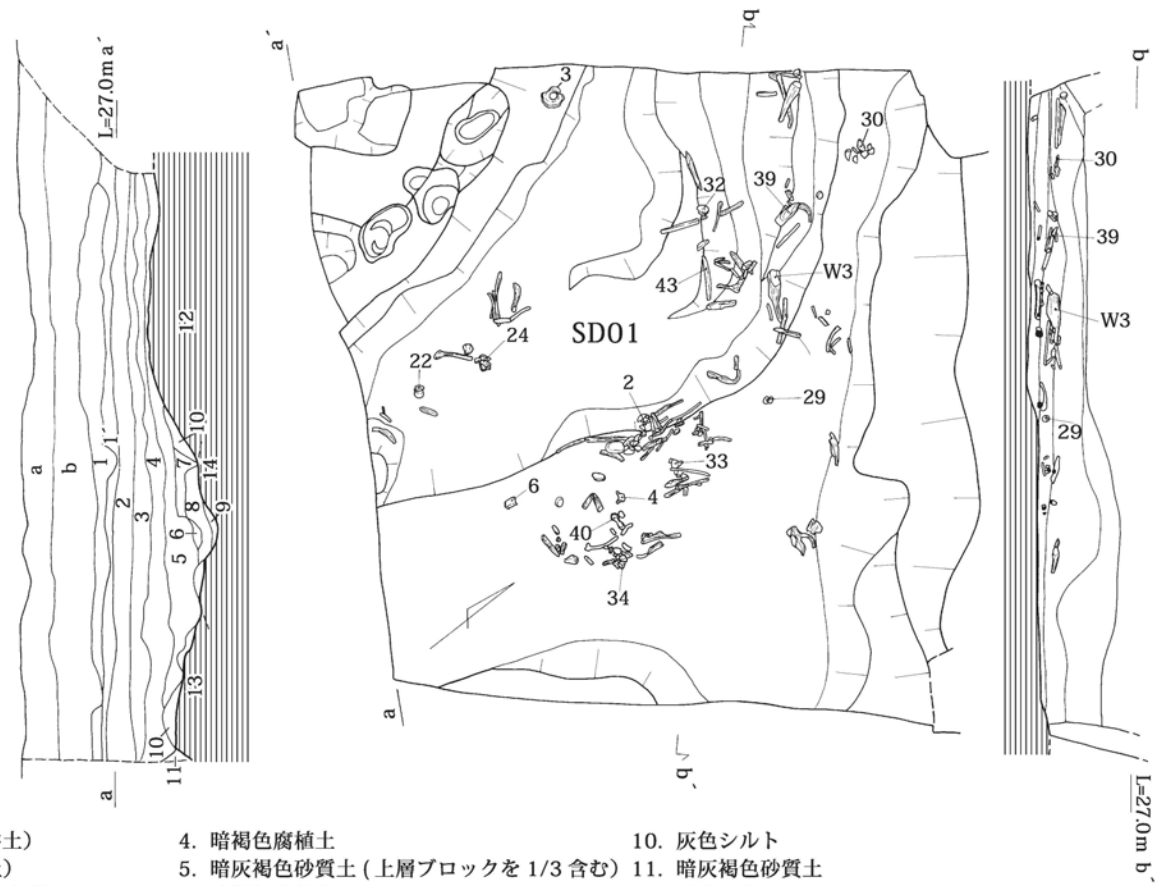
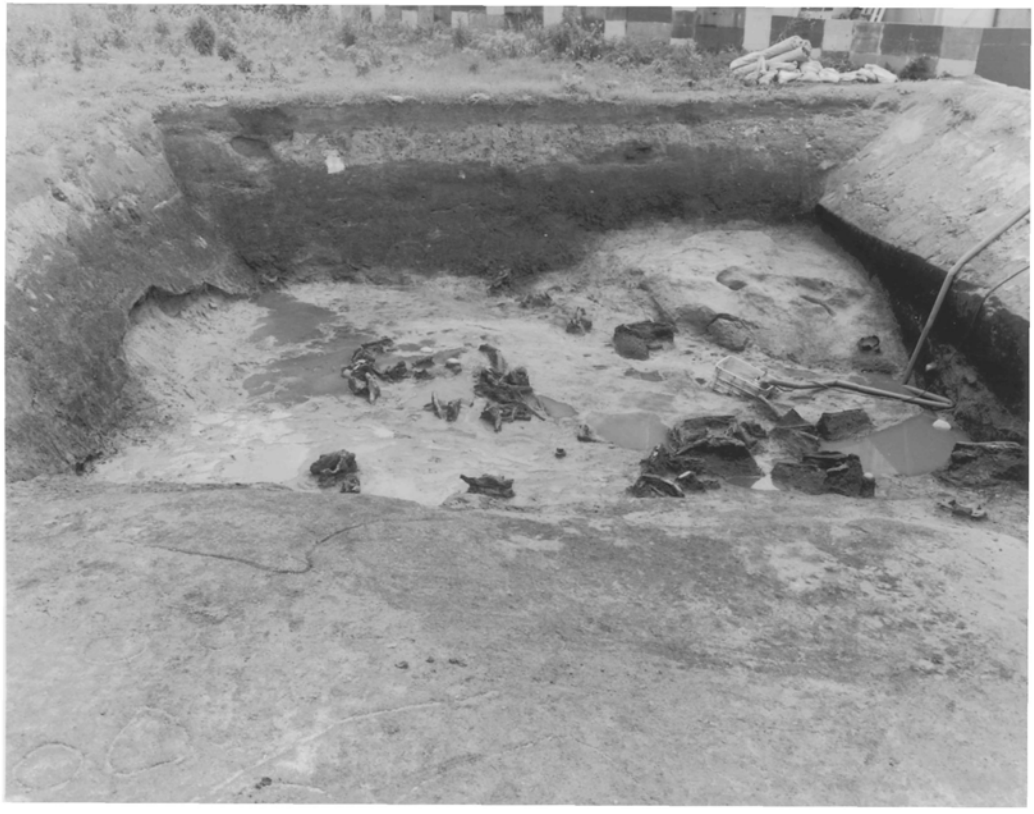


Fig.6 SD01 実測図 (S=1/80)

Ph.5 流路 SD01（北西から）



Ph.6 SD01（北東から）

ケ後口唇内外と口縁外面は緩いヨコナデ。外面に接合痕・指頭圧痕が残る。胴部外面上位はタテハケ、内面頸部下にケズリ。粗い石英粒を多く含み、鈍い黄橙色を呈す。13は口唇外面を面取りし外端部が肥厚。口径16.2㎝胴径23㎝。口縁外面にタテハケ後口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面上・下位はナナメハケ、中位はヨコハケ、内面頸部下にヨコケズリ、頸部を中心に指頭圧痕が残る。粗い石英粒を多く含み鈍い黄褐色を呈す。14は外傾する口唇口縁を面取りし凹線を施す。口径15.4㎝。口縁内外面にヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面頸部下にケズリ。灰黄褐色を呈す。15は端部を丸く収め、口径16.4㎝。口縁外面にタテハケ後内外面にヨコナデ、胴部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、内面頸部下にケズリ。灰黄褐色を呈す。16は外傾する口唇端部を面取りし、口径14.6㎝。口縁内外面に

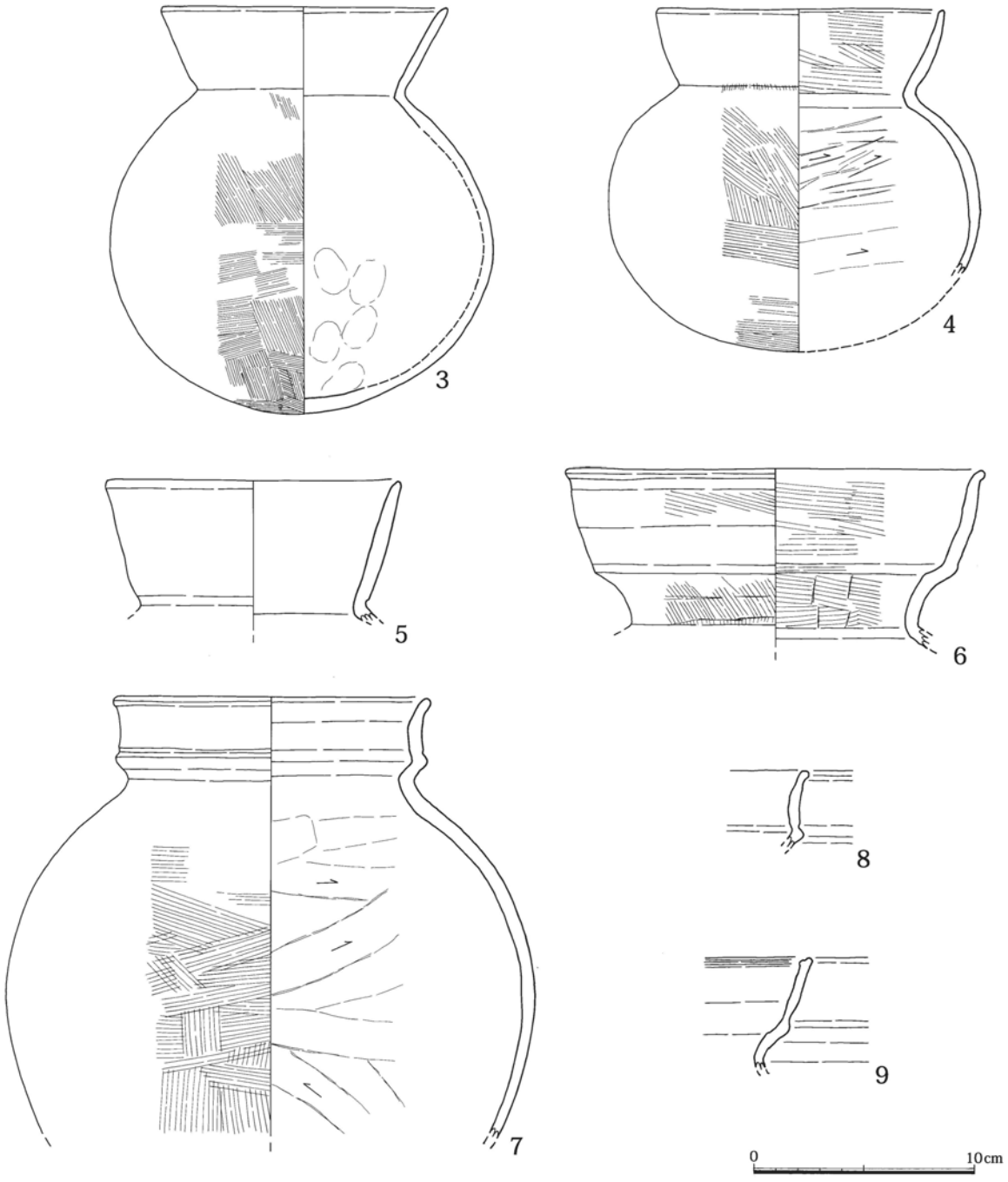


Fig.7 SD01出土遺物実測図.1（S=1/3）

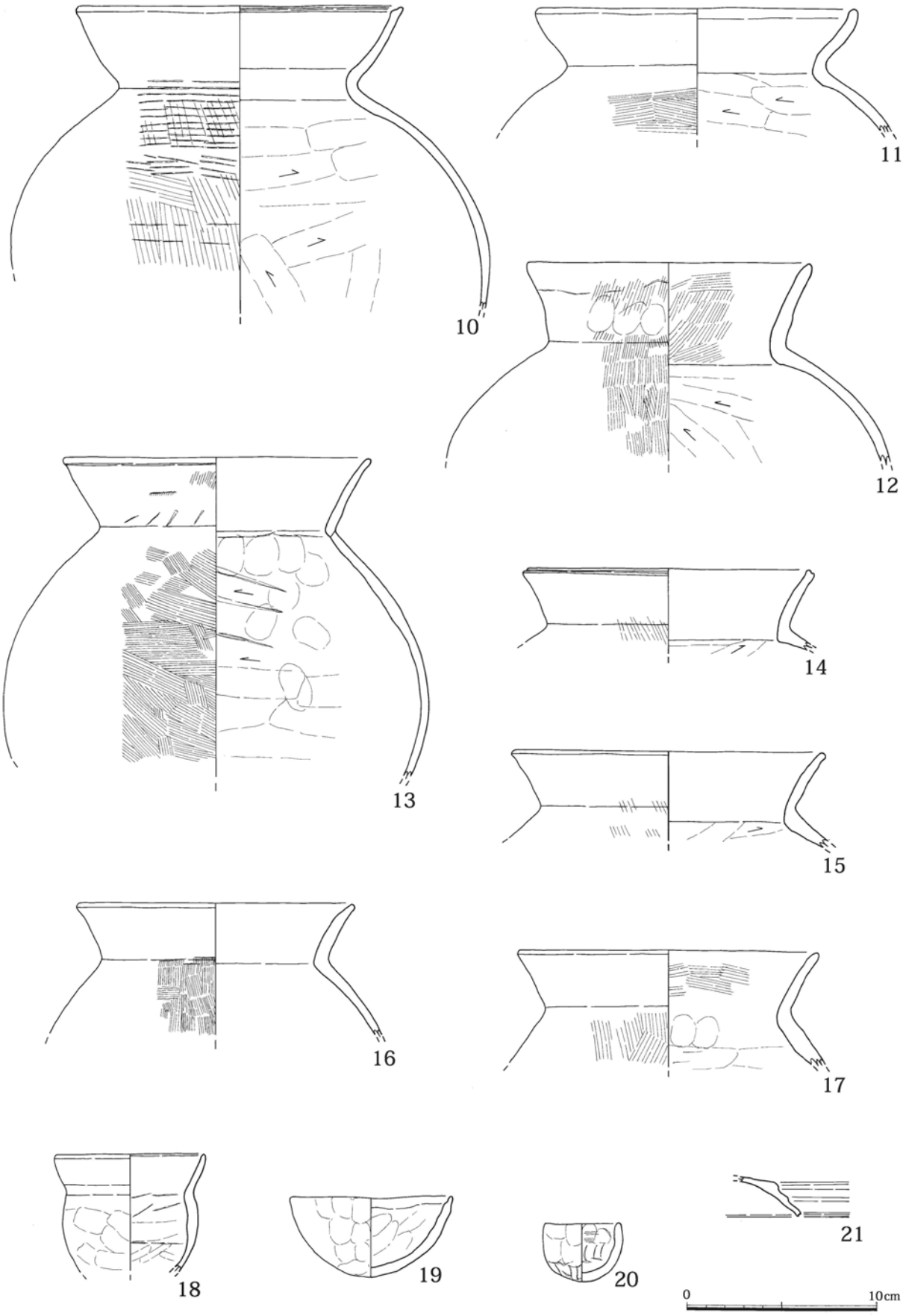


Fig.8 SD01 出土遺物実測図.2 (S=1/3)

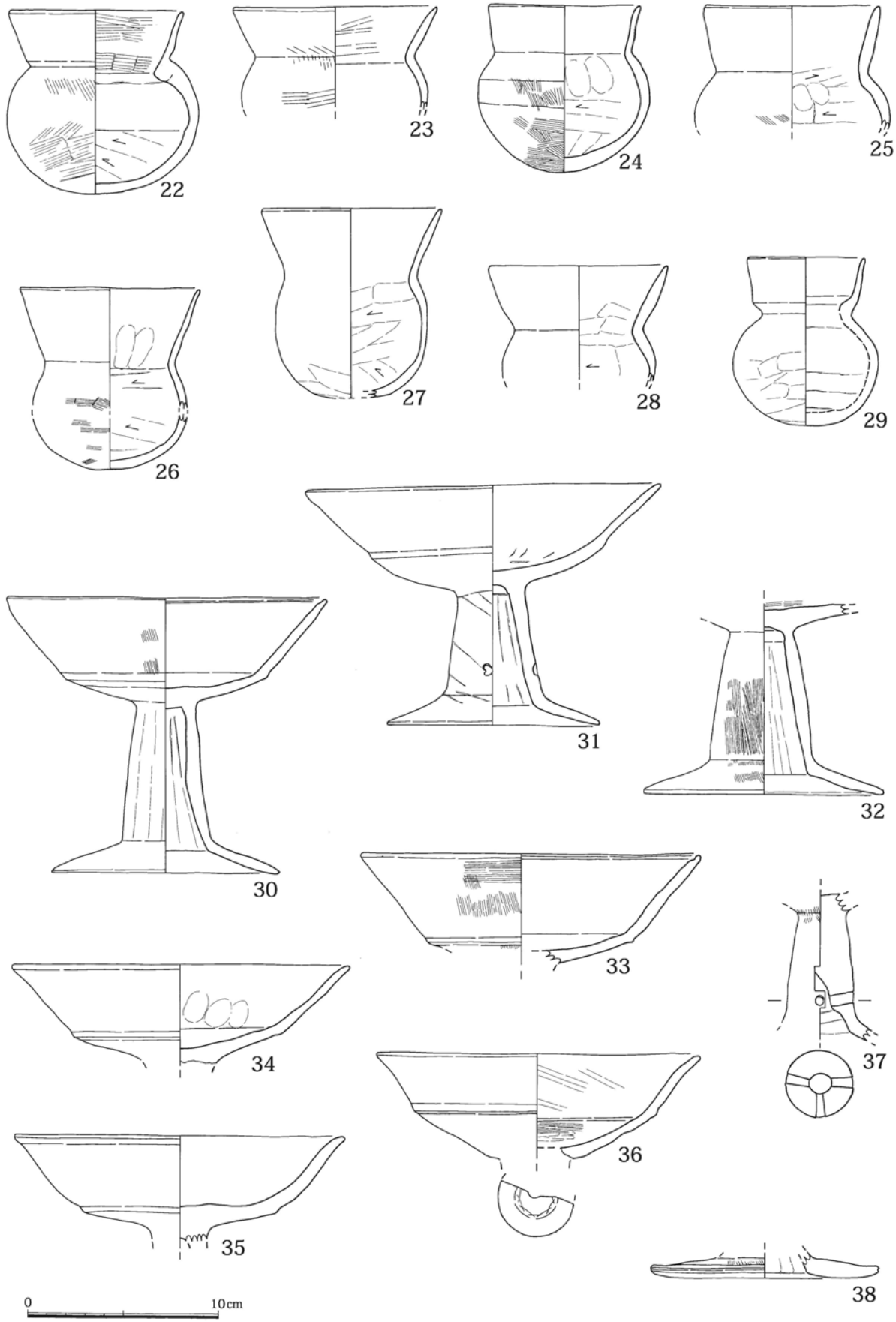
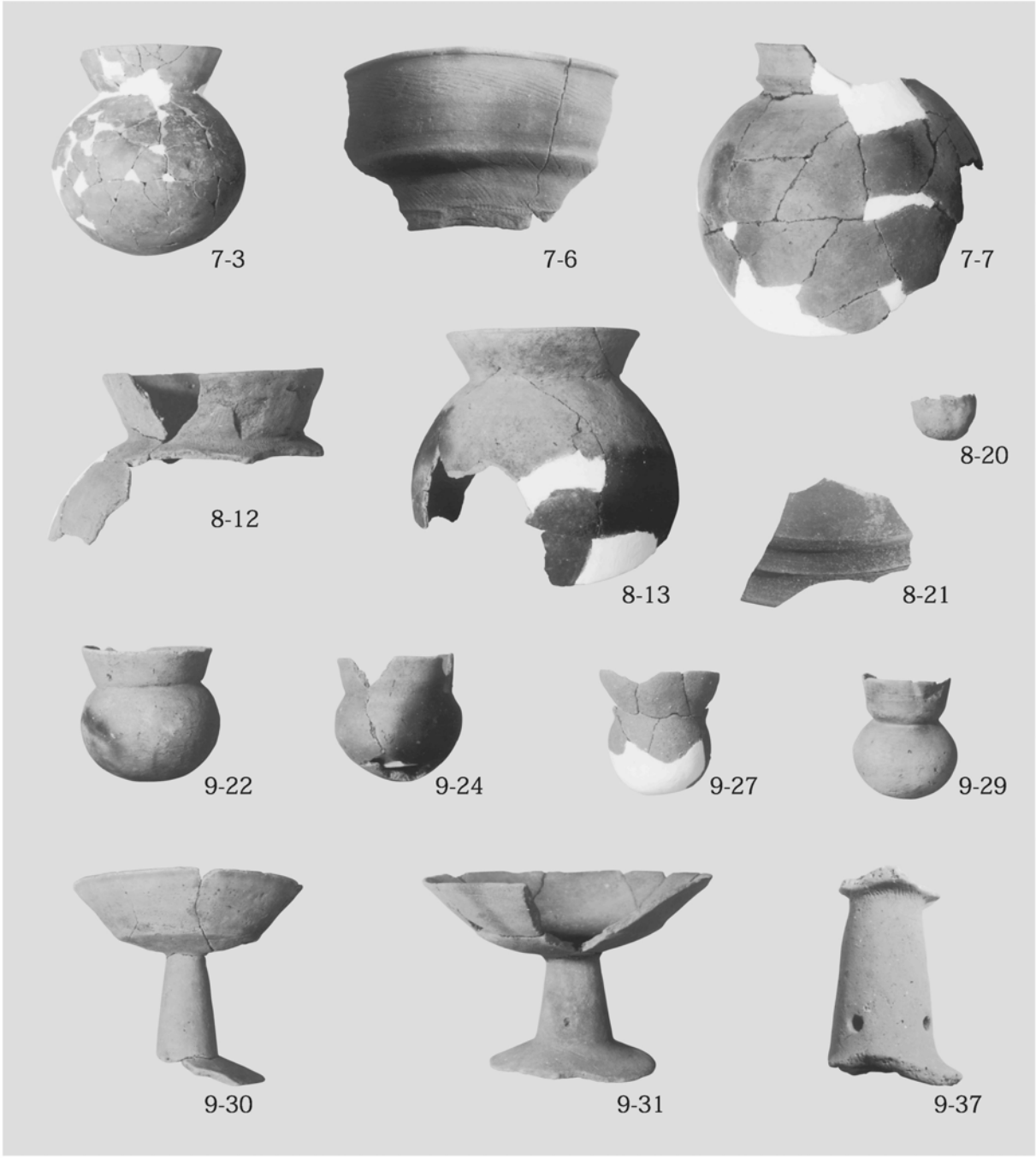


Fig.9 SD01 出土遺物実測図.3 (S=1/3)

ヨコナデ、胴部外面上位はタテハケ、内面頸部下にナデ。粗い石英粒を含み鈍い黄橙色を呈す。17は口縁の端部を丸く収め、口径16㎝。口縁内面にヨコハケ、外面にヨコナデ、胴部外面上位はタテハケ、内面頸部は稜を成さず指頭圧痕を残し、以下にヨコケズリ。粗い石英粒を多く含み灰黄褐色を呈す。18～20はミニチュア土器で、18は甕形。内湾気味の口縁で、口径8㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部内外面にケズリ。粗い石英粒を含み灰黄褐色を呈す。19・20は鉢形。19は浅い鉢形で口径8.6㎝器高4.3㎝。外面にヨコナデ、指頭圧痕を多く残す。粗い石英粒を含み黄橙色を呈す。20は深い器体で口径4㎝器高3.1㎝。外面にヨコナデ、指頭圧痕を多く残す。胎土は精良で灰黄褐色を呈す。21は1片のみの出土の陶質土器の脚端部。端部下面を面取りし沈線を施し、外面屈曲部に凹線を2条施す。胎土は精良で外面は灰黒色内面は灰色を呈す。22～29は土師器坩で、22は口径9.2㎝器高9.6㎝。



Ph.7 SD01 出土土器

Ph.8 舟形木製品 39 出土状況(北から)

口縁内面にヨコハケ後内外面にヨコナデ、胴部外面上位はタテハケ後ヨコナデ、下位はケズリ様のヨコイタナデ。内面頸部下にヨコナデ・下位にケズリ。粗い石英粒を含み鈍い橙色を呈す。23は口径10.8㎝、口縁内外にヨコ・ナナメハケ後ヨコナデ、胴部外面上位はハケ後ヨコナデ、内面頸部下にヘラナデ。胎土は精良で橙色を呈す。24は直口気味の口縁で口径8㎝器高8.8㎝。口頸部内外面にヨコナデ、胴部外面中位はタテハケ、下位はヨコ・ナナメハケ。内面頸部下にヨコナデ・下位にケズリ。粗い石英粒を含み鈍い橙色を呈す。25～29は口縁が長いタイプで、25は口径9.2㎝、口頸部内外にヨコナデ、胴部外面中位はナナメハケ、内面頸部下にケズリ。灰黄褐色を呈す。26は口径9.5㎝器高9.6㎝。口頸部内外にヨコナデ内面に指頭圧痕が残る。胴部外面中位下はヨコハケ後ナデ、内面頸部下にケズリ。粗い石英粒を含み鈍い黄橙色を呈す。27は口径9.4㎝器高10㎝。口縁内面にヨコナデ、内面頸部下にケズリ。外面は摩滅で調整不明。鈍い橙色を呈す。28は口径9.4㎝で、口頸部内外にヨコナデ、胴部外面上中位はヨコナデ、

Ph.9 横槌木製品 40・土器 34 出土状況(南から)

Ph.10 刀状木製品 43・W3 出土状況(北東から)

Ph.11 石杵 53 他出土状況(北から)

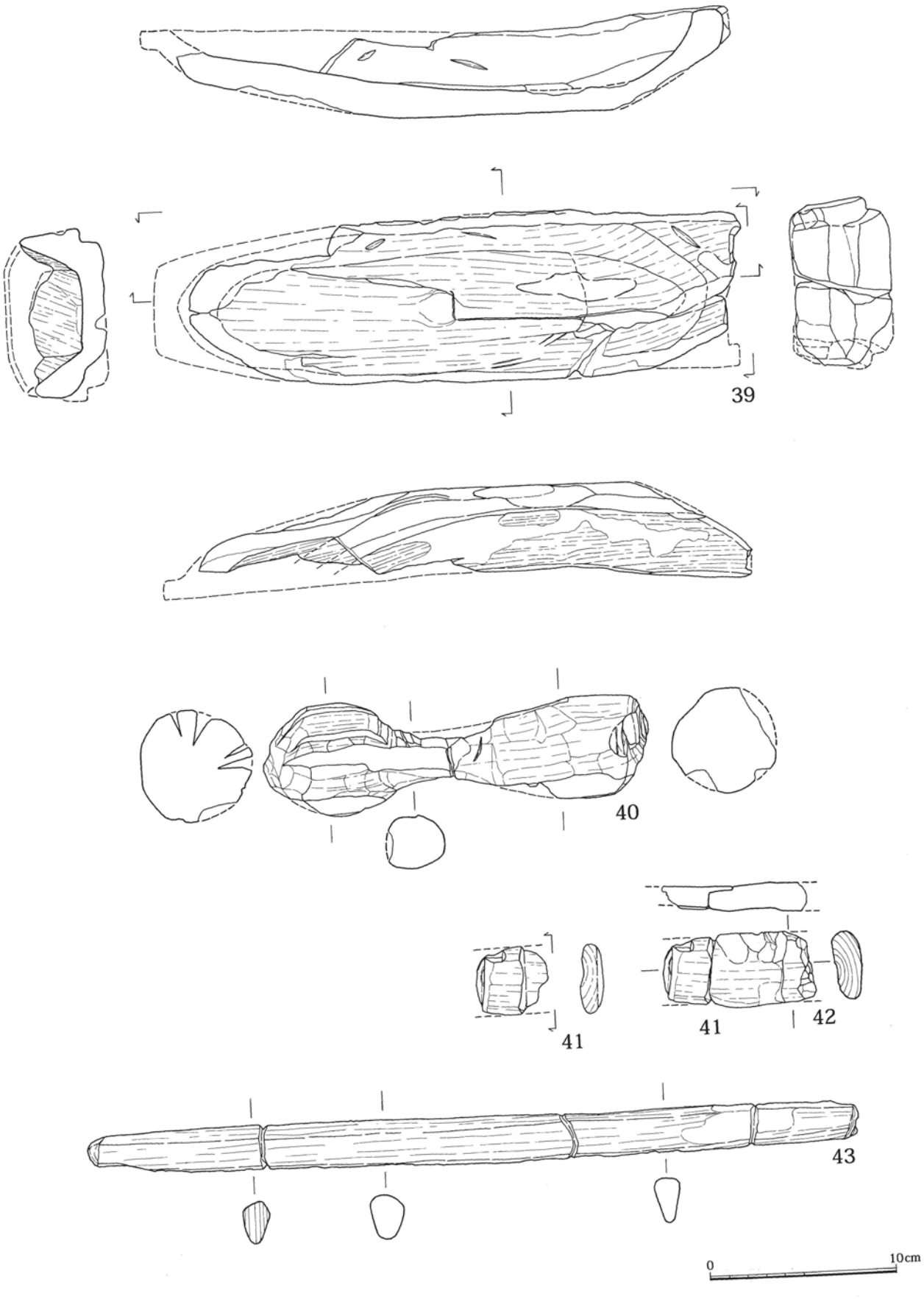


Fig.10 SD01 出土遺物実測図.4 (S=1/3)

内面口縁下位以下にケズリ。粗い石英粒を含み鈍い褐色を呈す。29は山陰系の二重口縁で、口径6.2㎝器高8.9㎝。口頸部内外にヨコナデ、胴部外面上中位はヨコナデ下位はケズリ、内面頸部下にヘラナデ下半にケズリ。粗い石英粒を含み鈍い橙色を呈す。30～38は土師器高坏。30は口径16.8㎝器高14.5㎝。坏部外面にタテハケ後ヨコナデ内面はヨコナデ。口唇内面に沈線を施す。脚部外面はタテヘラナデ脚部はヨコナデ。内面にシボリ痕が残る。粗い石英粒を含み橙色を呈す。31は口径18.6㎝器高12.7㎝。口縁内外と体部外面はヨコナデ内面はヘラナデ、脚部にネジリ痕が残り貫通しない装飾孔を1箇所施す。内面にシボリ痕が残る。粗い石英粒を含み灰黄褐色を呈す。32は脚径12.6㎝。外面にタテハケ後端部をヨコナデ、内面はヘラケズリ端部はヨコナデ。粗い石英粒を含み鈍い褐色を呈す。33は口径17.8㎝。坏部外面にタテハケ後ヨコナデ内面はヨコナデ。口唇に沈線を施す。粗い石英粒を含み鈍い黄橙色を呈す。34は口径17.8㎝。坏部内外面にヨコナデ内面に指頭圧痕が残る。粗い石英粒を多く含み鈍い橙色を呈す。35は脚が細く、口縁がやや内湾し端部が外反。口径17.4㎝。全面にヨコナデ。胎土は精良で鈍い黄橙色を呈す。36は口径16.9㎝。坏部内外に粗いヨコナデ。脚部外面はタテヘラナデ脚部はヨコナデ。体部内面にヨコハケが残る。赤色粒を含み鈍い橙色を呈す。37は細い脚で外面はタテハケ後ナデ。装飾孔を4箇所施す。内面はヨコケズリ。石英粒を多く含み橙色を呈す。38はやや外反する脚端部で径12㎝。内外面にハケ後ヨコナデ。胎土は精良で鈍い橙色を呈す。39～52は木器。39は準構造船の舟形で（Ph.12）舳先を欠損し左舷が多く腐食する。現況で全長29.7㎝全幅9.2㎝全高5.3㎝を測る。吉武遺跡群第5次調査出土品に相似し、これを参照に復元すると、全長31.5㎝で舳先が広い船体となる。写実的な造作で、平底の船底から舳先と艫が大きく直線的に上が

Ph.12 舟形木製品 39

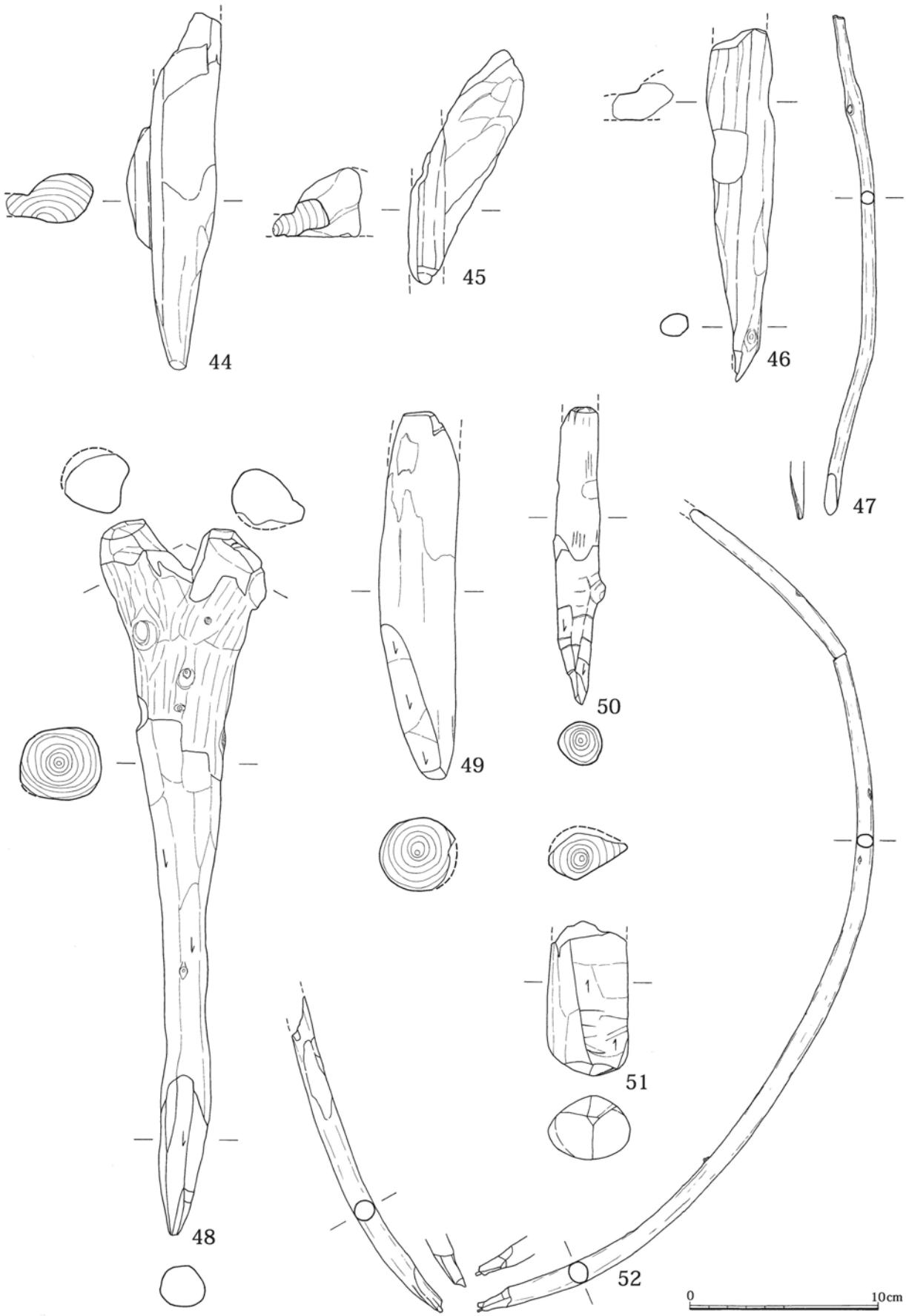
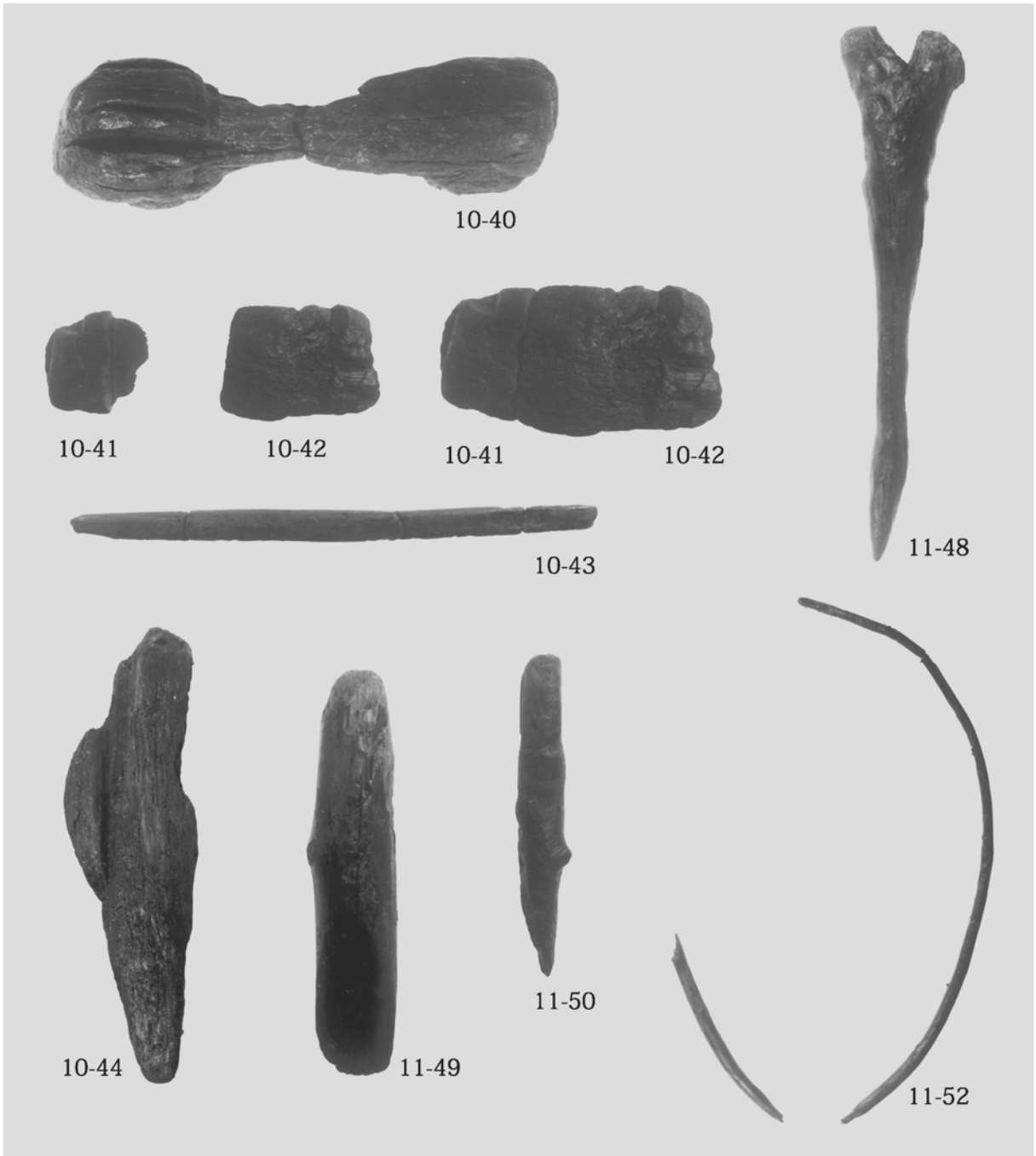


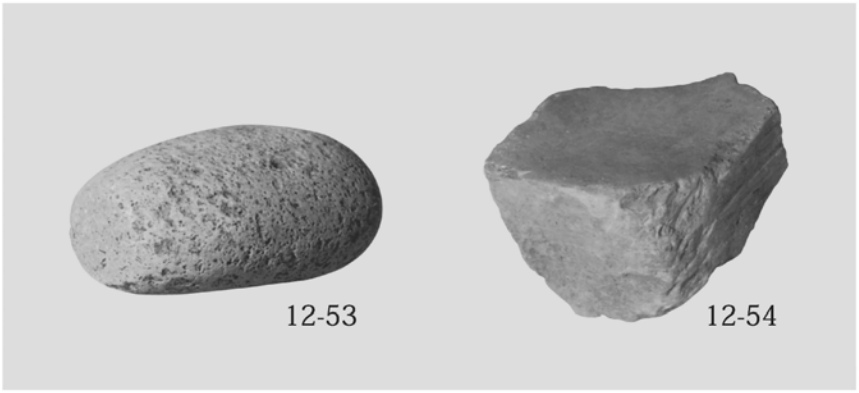
Fig.11 SD01 出土遺物実測図 .5（S=1/3）

り、両側の舷側板・艫の舵を囲う「ちり」部分も忠実に削り出される。船内は舟形に刳り抜かれ、外面は箱形の造作となる。40は横槌で全長20.6球形の握部径で6.1槌部で径5.6㎝を測る。芯材を用い放射状のひびが入る。41・42・43は刀状木製品。41・42は断片で、41で幅3.6厚1.3㎝、42で幅4.0厚1.6㎝で切断面が接合する。ともに切断後炭化。43は完形品で全長41.4幅2.1～2.5厚1.2～2.0㎝を測る。柾目板を用い、下方を両側から刃状に丁寧に細く削る。織器の緯打具とも思ったが幅が短く厚みがあり両面に縦糸の擦痕が無く、刃部が敲打により減っており、脱穀等に用いるコキ箸の類と考える。44～46は扉軸部を転用した杭で燃えさしとなっている。44は現存長19㎝。厚2.6㎝の板を軸の円柱状に残して厚1.3㎝の扉板を削り出す。45・46も同様で、45で現存長12.5厚3.5～1.2㎝を、46で現存長18.9厚2.0＋α～1.3㎝を測る。



Ph.13 SD01 出土木器

47は小枝を用いた串。全長26.5径0.7㎝。先端片切にし剣とする。48は枝の又部を用いた支柱で全長36.9㎝。又部を2～3㎝残して切断し、25㎝程を全周削り先端に剣をたて地中に刺すよう加工する。49・50は杭の剣部残片。49は現存長19.5径4㎝を測り、先端を片切とする。50は残存長15.9径2.4㎝を測り、3面を削り剣をたてる。51は先の潰れた杭剣先を切断したもの。7.7×4.5㎝を測る。52は柳等の枝を用いたタモ網の枠で現存長54㎝径0.7～1.24を測り、両先端を削り軸木に差し込むよう加工する。W3（Fig.6 Ph.10手前）は全長55幅13㎝で当初鋤未製品と考えたが、取り上げ時長さ28㎝程の体部が厚み15㎝程の方柱状であり、枝を柄部とした付根裏側に樹幹の「うろ」を取込み共鳴胴とする意匠が確認された。細片に分解してしまい現在まで復元できていない。54は花崗岩自然円礫を用いた石杵で14.6×8.2×6.5㎝1,154gを測る。上下端面を使用し、下面は殊に光沢を持つほど使用される。本市埋蔵文化財センターでの顕微鏡観察で下端面際の窪みに0.3㎜範囲の赤色顔料が確認され微小部蛍光X線分析装置での分析結果、水銀朱であることが確認された。54は細粒砂岩製の砥石で上面と側面の2面を砥面とする。現存で9.4×9.1×6.6㎝を測る。55は径4.3厚0.8㎝の土師器土器片円盤、全周を打ち欠く。以上5世紀初頭前後を示す。



Ph.14 SD01出土石器

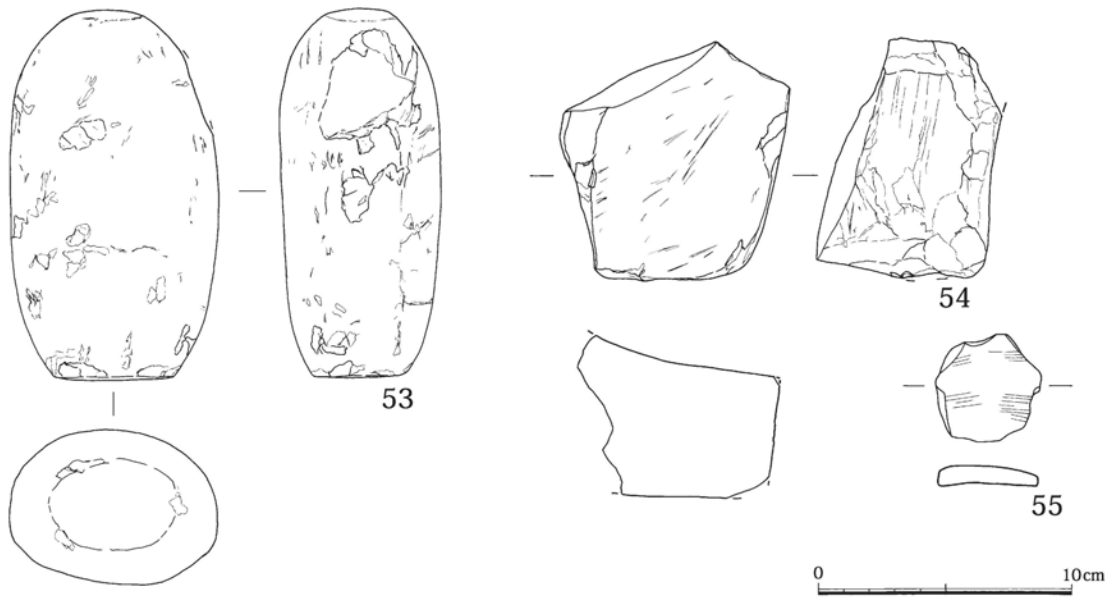


Fig.12 SD01出土遺物実測図.6（S=1/3）

2）.不整形土壙SX02（Fig.13 Ph.15・16）　SX02は丘陵部先端中央に位置する不整形土壙で、6.7×4.7深さ0.45mを測る。1～3m程の段が下方から上方に数段連なっており土取場の可能性もある。堆積は単純で腐植土混じりの灰褐色シルト（6層）が堆積後、腐植土を多量に含む黒褐色土（5層）が堆積する。埋没後焼土壙SK03・04や土壙（SK05）・柱穴が掘削される。出土遺物は土師器壺・甕・坩・高坏の小片と黒耀石剥片などが少量検出されている。流路SD01と同時期と思われる。

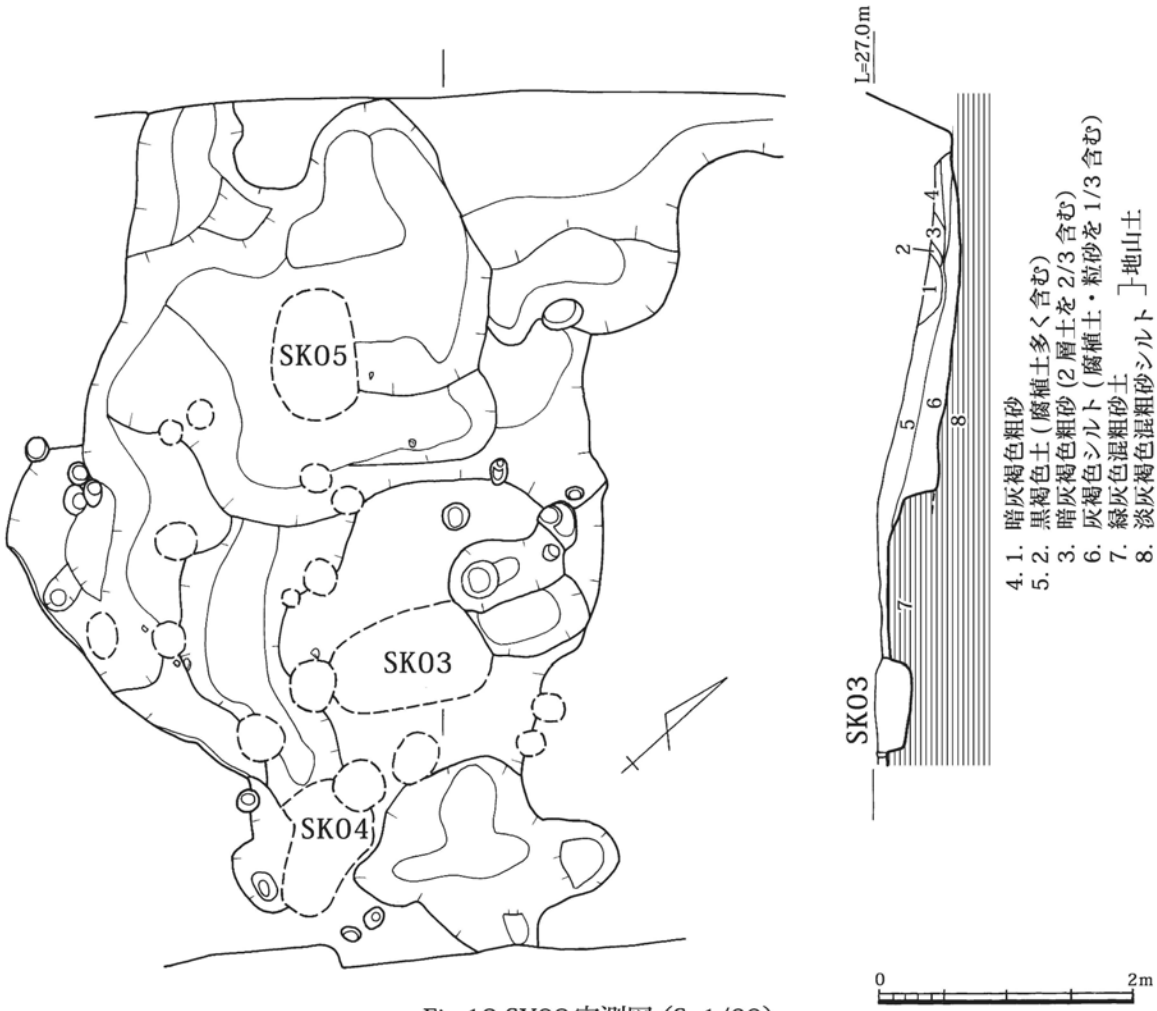


Fig.13 SX02実測図（S=1/60）

Ph.15 SX02土層断面（東から）

Ph.16 SX02・SK05（北西から）

4．古代・中世の調査

古代・中世の遺構は調査区丘陵上と流路埋没後の堆積層（Fig.14土層断面図1層・Fig.6土層断面図1層）の暗灰～暗灰褐色混粗砂土が包含層として広がり、これを覆土とした焼土壙・土壙・柱穴が掘削されている。

1）．焼土壙

今回の調査では不整形土壙SX02を切って2基の焼土壙が検出された。

SK03（Fig.14 Ph.17・18）　SK03は不整形土壙SX02上のE3グリッドに位置し、これの5層上から掘り込まれる。平面は1.26×0.73mの北がやや広い長台形で、主軸を等高線に並行にとる。深さ27㎝を測り、船底形の底面上に3～10㎝程黒灰色炭灰が堆積しさらに暗灰褐色・黒灰色混粗砂土が上方から流れ込んだ状態で堆積する。底面から15㎝程上の壁面の一部が被熱で赤変する。遺物の出土は無い。

SK04（Fig.14 Ph.19）　SK04は同じく不整形土壙SX02を切ってSK03の南50㎝程の位置に、SK03と直交方向に掘削される。平面は1.05×0.64mの一方がやや広い長台形で、主軸を等高線に直交にとる。船底形で深さ22㎝の底面上に数㎝黒灰色炭灰が堆積し、上に暗灰褐色混粗砂土が堆積する。壁面の被熱は確認できなかった。遺物は土師器の甕小片が数片出土する。

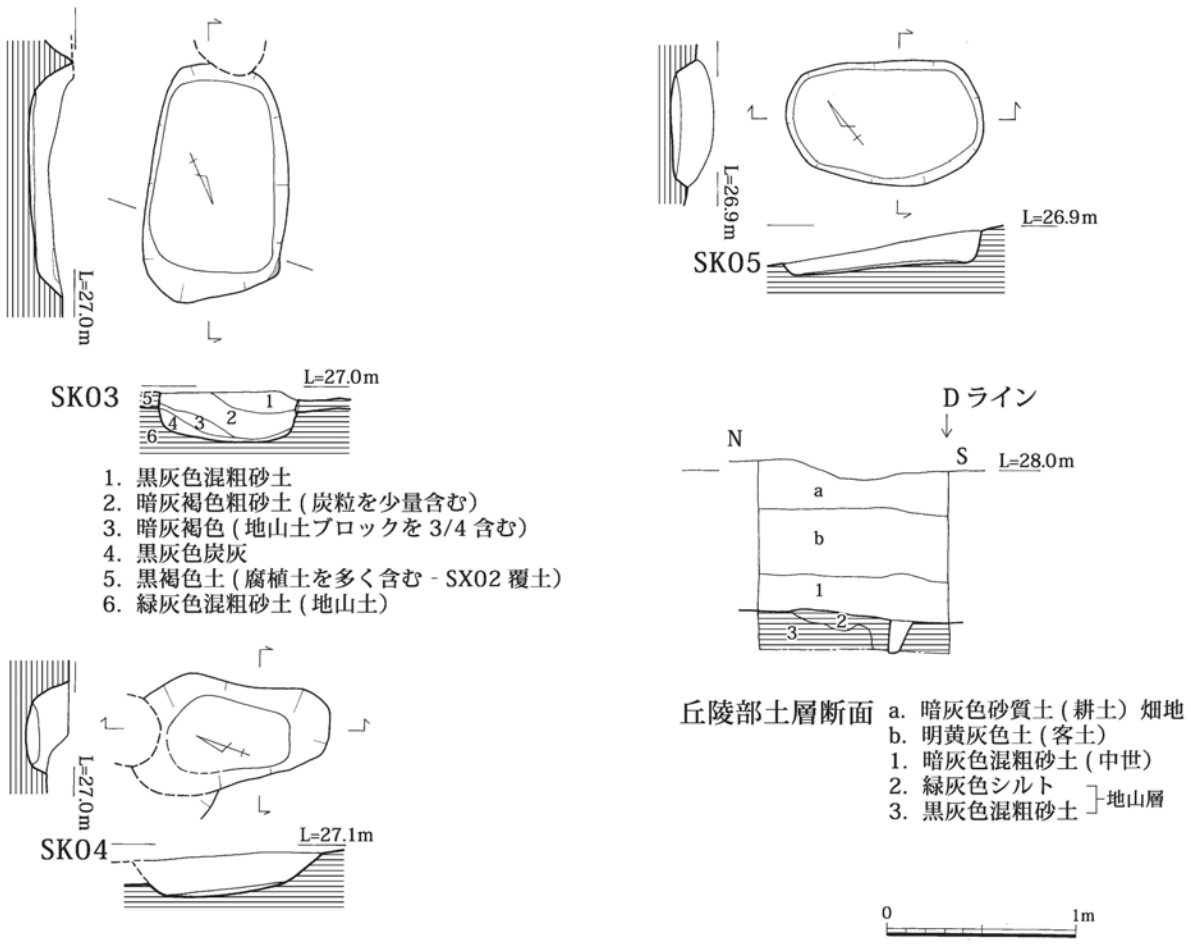


Fig.14 SK03・04・05・丘陵部土層断面実測図（S=1/40）

2）．土壙SK05（Fig.14）

土壙SK05は不整形土壙SX02を切りE2グリッドの、焼土壙SK03・04の延長線上に位置する。平面は1.05×0.65mの楕円形で、深さ15㎝を測る。底面は平坦。覆土は暗灰褐色混粗砂土で遺物の出土はない。

3）．包含層（Fig.14 Ph.20）

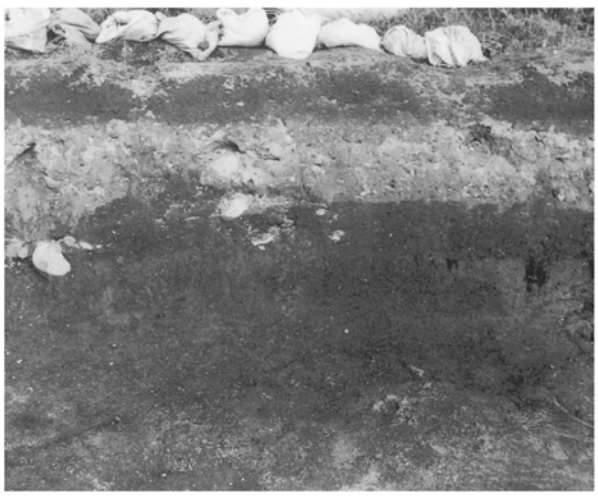
丘陵部の黒灰色混粗砂土・緑灰色シルトの地山層上と流路SX01埋没覆土の暗灰褐色土上に20㎝前後堆積する暗灰～暗灰褐色混粗砂土層（Fig.14土層断面図1層・Fig.6土層断面図1層）で包含層として広がり、これを覆土とした焼土壙等が掘削されている。

出土遺物（Fig.15 Ph.21） 56はSD01の南東壁面が大雨で崩落した埋土から出土した高麗無釉陶器甕の底部片で、外面に細かな格子目タタキ後緩くナデ、内面は平行・平行弧の当て具痕が残る。暗灰色を呈し、焼成はやや甘い。57はD1グリッド包含層出土の糸切り土師器の坏底部で、底径9㎝。胎土は精良で浅黄橙色を呈する。58も同グリッド出土の椀形滓で3.8×6㎝で下面に土砂が付着する。

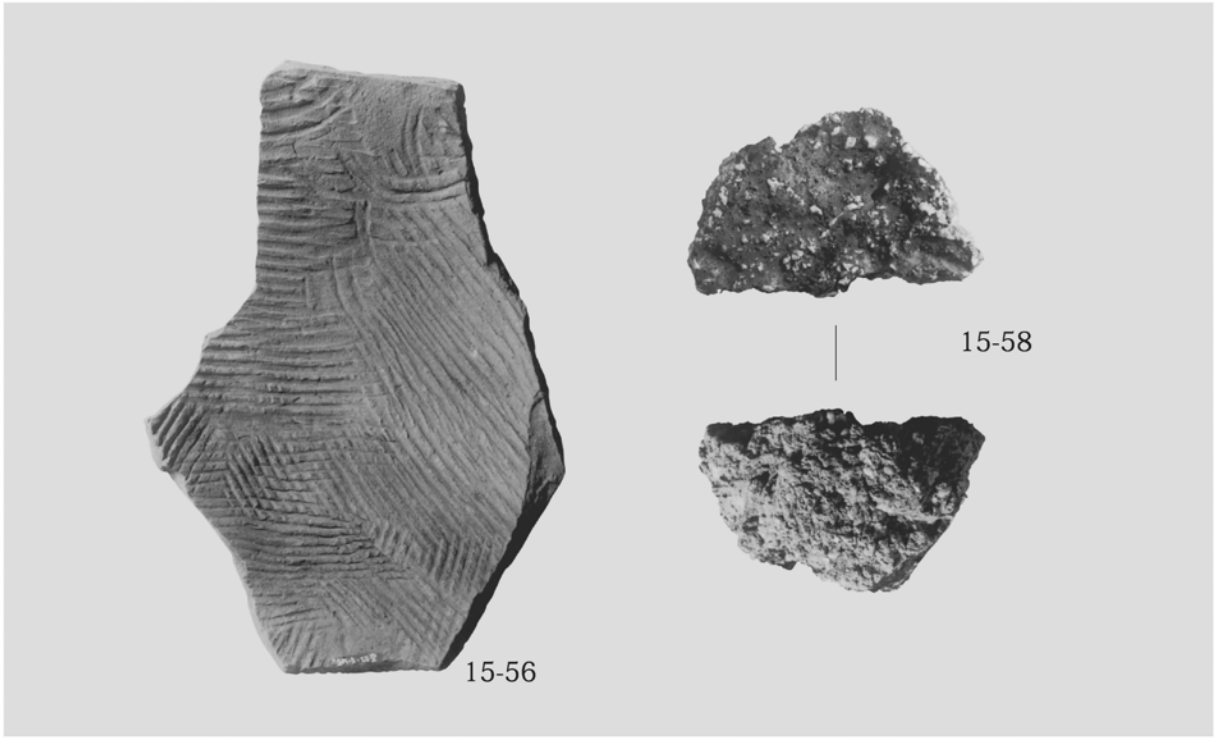
Ph.17 SK03 土層断面（北東から）

Ph.18 SK03（北東から）

Ph.19 SK04（南西から）



Ph.20 丘陵部土層断面（北西から）



Ph.21 古代・中世遺物

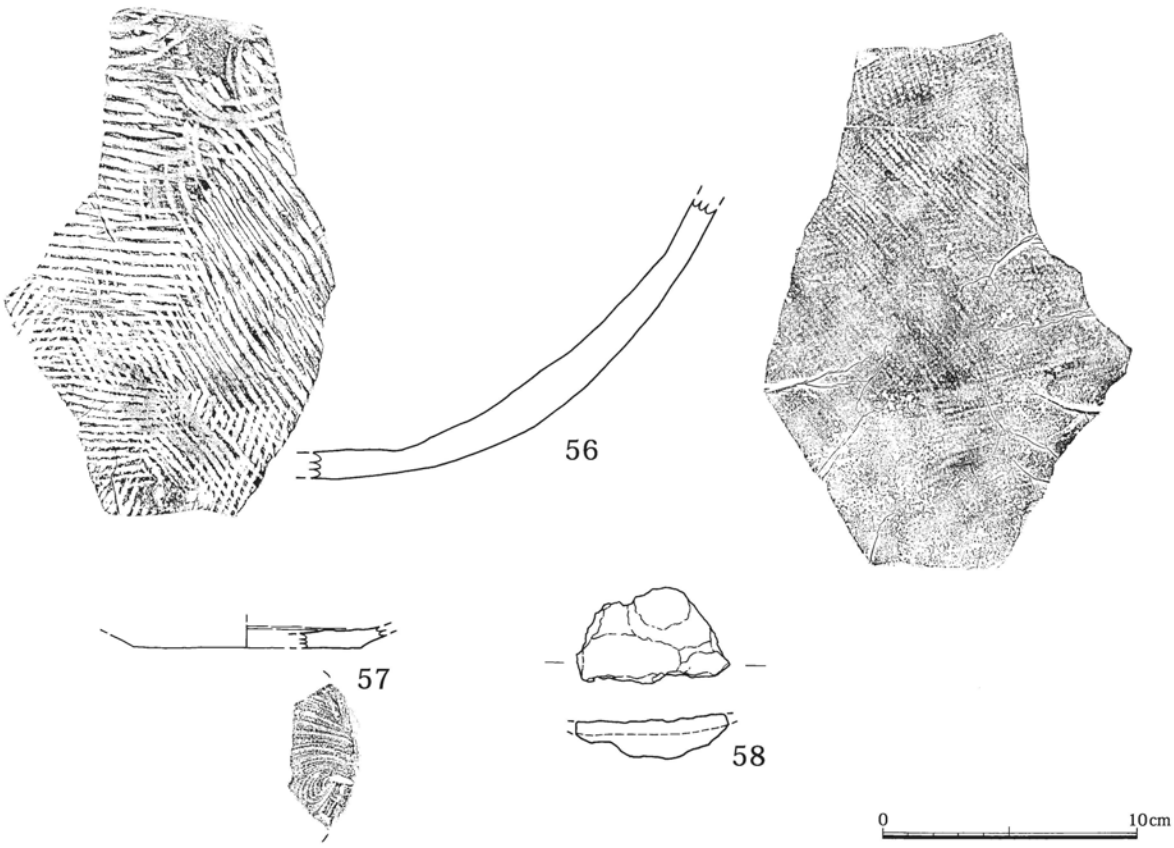


Fig.15 古代・中世出土遺物実測図 (S=1/3)

Ⅳ．小結

調査の結果、本調査区は樹枝状に谷が開析する低位段丘砂礫台地の先端部に位置し、北・西・南の三方を古墳時代後期の腐植土が厚く堆積する低湿地に囲まれた状態で、南に幅6.5mの流路SD01が、台地上では径6.7m程の不整形土壙SX02を中心に、柱穴・古代～中世の焼土壙2基・土壙1基を検出した。古墳時代後期集落の中心からは外れており、住居等の生活遺構は検出されない。厚い腐植土の堆積から、流れは2度程洪水砂を挟むが流れは殆ど滞留した状態で、丘陵先端の立地を考え合わせると、程近い下流側に流れを堰き止める井堰等の潅漑施設の存在が想定される。

この井堰に程近い上流部の、削岸するなど人為的に管理された流路SD01で、多量の5世紀初頭前後の高坏・坩を中心とする土師器、舟形木製品・刀状木製品・横槌などの木器、水銀朱用の石杵など古墳時代後期の水辺での祭祀が執り行われた状態が見て取れる。

周辺の古墳時代遺跡の水辺祭祀では、野芥遺跡第8次調査の5世紀前半水路廃棄時の絵画土器をはじめ土師器・ミニチュア土器・鏡形土製品を用いた祭祀、次郎丸遺跡第1・3次調査の5世紀前半水路廃棄時の土師器・陶質瓦質土器・線刻土製板・鉄矛・鉄滓を用いた祭祀、拾六町平田遺跡第2次調査の5世紀中～後半環溝内の土師器・須恵器・ミニチュア土器・鏡形土製品・土玉・滑石製子持勾玉・有孔円盤等を用いた祭祀、吉武遺跡群第4次調査の5世紀後半～ 6世紀初頭前後水路内の舟形木製品他木器・滑石製子持勾玉等を用いた祭祀があり、殊に吉武例は本遺跡と類似する。本遺跡や吉武遺跡群・拾六町平田遺跡の様な水路使用時の祭祀と野芥遺跡・次郎丸遺跡の様に水路廃棄時の2種の祭祀が執り行われている。

また、SD01出土の舟形木製品は準構造船を模しており、吉武遺跡群第4次調査3号水路出土品に次ぐもので、吉武例が5世紀後半～6世紀初頭前後、本例が5世紀初頭前後と、本例が先行する。
スケールを合わせ比較すると、吉武例は全長58.5幅11.3全高9.0㎝、本例は全長29.7幅9.2全高5.3㎝と全長・全高はほぼ半分、幅はほぼ同規模で吉武例が長幅比5.2：1に対し本例が3.2：1と寸づまりの幅広、幅高比も1.25：1に対し1.74：1と船体も浅く、平底の箱形で「川平田」に近い。吉武例は船体は長大で前後が細い丸底の流麗な船形であり、写実の巧拙を別にすれば、時期差であるよりも海洋航行船と内水面航行船・外洋航行船と近海航行船等の機能差であるように思える。

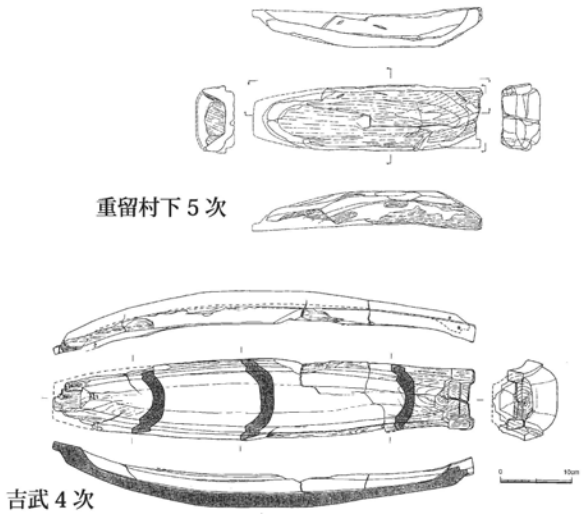


Fig.16 吉武・重留村下舟形木製品

参照文献

「野芥遺跡3」
福岡市埋蔵文化財調査報告書578集
「拾六町平田遺跡2」
福岡市埋蔵文化財調査報告書349集
「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告1」
福岡市埋蔵文化財調査報告書467集
「次郎丸遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書468集」
「吉武遺跡群XⅧ」
福岡市埋蔵文化財調査報告書911集

報告書抄録

ふりがな	しげとめむらした							
書名	重留村下遺跡４							
副書名	重留村下遺跡群第５次調査報告							
巻次	４							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	979							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1-8-1　TEL 092-711-4667							
発行年月日	20080317							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しげとめむらした 重留村下遺跡群	ふくおかしさわらくしげとめ 福岡市早良区重留 6-650-2番	40135	0324	33° 32′ 05″	130° 19′ 32″	20060605～ 20060705	200.1	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
重留村下遺跡群	集落	古墳	流路	土師器 木器 石器		５世紀初頭前後の準構造線を模した舟形木製品と水銀朱用の石杵の出土		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第979集

重留村下遺跡４

－重留村下遺跡群第５次調査報告－

発行　2008年3月17日
福岡市教育委員会
〒810-8621
福岡市中央区天神１丁目８番１号
印刷　株式会社嶋井精華堂
福岡市博多区吉塚１丁目34-3